

中世シチリア王国

知られざるその歴史

社会文化科学教育部
文化学専攻 歴史学
修士2年 中島 駿介

12世紀中頃、十字軍最盛期のヨーロッパに、キリスト教徒とムスリムが共存する国があった。キリスト教徒の王のもとでムスリムの役人や兵士が仕えていて、街にもムスリムがあふれていたようだ。



シチリア王国の領域

こうした共存が成り立ったのは、経済的・軍事的な要因が大きいように思われる。シチリアを侵略したキリスト教徒たちは、そこに住むムスリムたちを追放するよりも、一定の寛容を条件に服従させて利益を得ることを選んだ。そこから始まった共存は、文化的接触を生み、独自の文化が生まれることとなる。十字軍の時代においても、宗教間の二項対立という単純な図式に収まらない理屈で人々は動いていた。

王国を訪れた旅行者は次のような記録を残している。

「...この町のキリスト教徒の女たちは、ムスリム女性のような装いをしている。...優雅な衣服で身を包み、色付きのベールで顔を覆い、金糸で刺繍したスリッパを履いて出てきた。...」

我々が想定する中世ヨーロッパ像と大きく違う世界がそこには広がっていた。



モスクのような見た目の教会
パレルモにて筆者撮影



エボリのペトルス『皇帝の誉れに寄する書』より抜粋。王の行進の先頭にはムスリムのらっぱ手が描かれている。

出典：Pietro da Eboli (trans. by Gwennyth Hood), *Book in Honor of Augustus (Liber ad Honorem Augusti)*, Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, 2012, p.280.